

保育学科の現状と今後

近藤鉄浩

(宇部フロンティア大学短期大学部保育学科・現学科長)

Present Status and Future of Department of nursery education

Tetsuhiro Kondo

(Department of Nursery Education, Ube Frontier College; Department Chairman)

創設 50 周年を迎えた本学保育学科は、今の時代に求められ、かつ通用する保育者の養成に取り組んできた。国の進める保育の動向を先取りした養成課程の設置やゼミ方式による総合演習など個々の学生の成長に寄与する教育に努めているが、定員確保の困難に加え学力等の多様な問題を抱えた学生の増加など様々な課題を抱えている。「保育現場から期待されていない養成校」から脱却しより良質な保育者を養成するために、教育の質向上に向けて取り組まなければならない。

キーワード：保育，保育者養成，教育の質

1. はじめに

筆者が本学に着任した平成 13 年、指定保育士養成施設いわゆる保育士の養成校は全国で 359 校であった。それが今では 653 校を数えるに至り急激な増加を示している（平成 28 年 4 月 1 日現在）。山口県内においても、着任時は本学を含めて 5 つの短大があるのみであったのが、今日では四年制大学 4 校、短期大学 5 校、専門学校 1 校となった。

学科創設 50 周年を迎えたわが保育学科は、山口県内で最も歴史と伝統のある保育者養成校である。これまで送り出してきた卒業生は 6,000 名を優に超えるが、1 人 1 人の卒業生の背後にはその何十倍もの数の子どもたちがいる。そのことを思うと、本学を選んで入学してきた学生に対する教育責任と良質の保育者を世に送り出す社会に対する責任の両方をしっかり果たしていかなければならないと痛感する次第である。

そうした中、保育学科が置かれている現状と今後の課題について概観する。

2. 保育学科の取り組み

2-1. 教育目標

保育学科では「社会人としての基本的態度と保育の専門知識・技術を身につけ、他者との協働を通して自らを活かし社会に貢献できる人材」の育成を教育目標に据えている。「社会人としての基本的態度」とは、一定レベルの教養がある、挨拶、礼儀、マナーといった点で子どもや同級生だけでなく様々な年代の人と関わるということを指す。「保育の専門知識・技術」は、今の社会の子どもと家族のニーズを理解し、保育者に必要とされる基本的知識・技術を有することに加えて、倫理綱領に対する理解を含んでいる。「他者との協働を通して自らを活かす」とは、他者のことに興味を持って行動できる、他者と協力できる、他者と協働する中で自己の役割を見出して貢献できる、誰かから指示されるのをただ待つのではなく、何かすることはないと自らアプローチしていける姿勢・行動力のことである。こうした目標のもと今の時代に通用する保育者の養成に取り組んでいる。

2-2. 教育の特徴

教育の特徴としては、保育士・幼稚園教諭になるための学習を柱としながら、今の時代の保育者に求めら

れるより幅の広い知識や技術を学習できるようなカリキュラムを整えている。平成27年4月より施行している「子ども・子育て支援新制度」では保育所・幼稚園以外の多様な形態による保育・幼児教育が展開され、また放課後児童クラブにおいては対象学年を拡大するなど、これまでにない制度面の拡充が図られている。本学科ではこうした動向を先取りし、山口県内唯一のベビーシッター養成（平成20年より）、児童厚生員養成（平成22年より）の課程を設置した。こうした新しい時代の保育を学習することにより、乳幼児のみならず学童までの子どもに関わる技術や、保育所・幼稚園にとどまらない多様な保育現場への理解を深めてもらうことをねらいとしている。

また、学科創設当初から卒業研究（現在は総合演習という科目名で実施）を課しており、1名の教員が数名の学生を担当して必要な指導を行うゼミ方式の体制で実施している。学生自身が掲げた研究テーマについて、担当教員の指導のもと研究を進め、最終的には2年次後期の総合演習発表会にて発表を行うこととしている。

学科で取得できる免許・資格は以下のとおりである。

〈保育学科で取得できる免許・資格〉

- ・幼稚園教諭二種免許状
- ・保育士資格
- ・社会福祉主事任用資格
- ・児童厚生二級指導員
- ・認定ベビーシッター資格
- ・レクリエーション・インストラクター資格
- ・公認障がい者スポーツ指導員資格（初級スポーツ指導員）

卒業生の中には、様々な資格を取得するための学習が保育現場に出た時の保育の引き出しの多さにつながっているという声があることから、他学にはない養成課程を設けたことに一定の意義を見出すことができる。一方、在学生にとってはただでさえ過密なスケジュールが資格取得をめざすことでさらに多忙が増すために、1つ1つの学習をこなすのが精一杯で、ややもすると消化不良に陥っている感もある。各種資格の取得はあくまで学生自身の選択によるが、学生にとって過度な負担にならない履修のしかたを指導する必要がある。

3. 学科の現状について

保育学科の運営や教育は 学生が子どもと関わる専門性を手に入れて、大好きな子どもたちと関わることを職業にすることを助けると同時に、子どもの成長・発達、子育て家庭への支援に貢献できる意義を有しているが、一方で下記に記すような困難や課題を抱えている。

3-1. 学生確保の困難

少子化が進む中、平成17年度を最後に入学者数は100名を割り、ここ10年間は毎年50名前後で推移している現状は、学生確保に悩むのは本学だけではないとはいえ全く予断を許さない。若者とりわけ女子中・高校生にとって保育は人気分野であり毎年一定数の志願者が見込めるはずなのだが、今日の状況は、受験生や保護者にとって、本学科は進学先として積極的に選択される要素に欠ける部分があることを物語っていると思われる。「全入時代」の今、入学生の中には、本学科の教育を受けるために入学してきたというよりは、他に行ける所がないからやむを得ず選んだことを伺わせる者も少なくなく、そうした学生は後述する様々な問題を抱えていることも多い。

3-2. 対応困難な学生の増加

学生の中には目的意識が高く学習態度も真面目で意欲的な者も少なくないが、一方で次に挙げるような姿が日常的に見られ指導に苦慮する者も見られる。

- ① TPOに応じた行動が取れない。
 - ・時間にルーズで遅刻が多い。
 - ・授業中の私語（特に座学の場合）
 - ・注意等により私語ができない状態になると居眠りをする。その居眠りも机に突っ伏して寝る。
 - ・スーツの着方がルーズ。 等
- ② 読む、書く、聞く、話すといった自己表現、対人コミュニケーションに必要とされるスキルが乏しい。
- ③ 基礎学力が低い者が多い。
- ④ 学習習慣が身につけていない。
 - ・授業時間外に勉強していない。定期試験前でさえ勉強していない者も存在する。
- ⑤ 自分自身で物事を考えられず、自ら探究することを諦めてすぐ答えを求める姿勢が強い。学習に関して受け身で、学ぶことについて他者（教員、実

習先の職員等)が配慮してくれることを当然と
思っている。

⑥劣等感が強い。「どうせ自分はバカだから」と思っ
ている。

⑦指導や注意に弱い。失敗を極度に恐れている。

⑧専門職になりたいという動機づけの弱さ。

こうしたまさに「学生の生徒化」とも呼ぶべき状況
は、「乳幼児の発達を誤らずに実践し、子どもの健全
な発達を保障する社会の構築に向けて、行動し発言
できる専門性を備えた保育者の養成が急を要してい
る」¹⁾中、保育者の役割の拡大に伴い過密化したカリ
キュラムに疲弊し、その内容を消化しきれないまま社
会に出ていく卒業生の増加につながっている。そのた
め保育者の評価を専門性ではなく人間性に頼るしか
なくなり、保育者の資質の向上が喫緊の課題となっ
ている。

4. 教育の質向上に向けて

保育者養成は養成校卒業時に免許資格を付与し卒業
生を保育現場に送り出すことから形の上では完成教育
となっているが、実情は就職後のさらなる研鑽なしに
は保育者としての成長や実務能力の向上はとうてい
なし得ない。そうした点をふまえて全国保育士養成協
議会は「成長し続ける」ことを保育士の専門性の一つ
として位置づけている²⁾。

それでは養成校である保育学科は保育者が成長し続
けるプロセスの中でどのような役割を担えばよいであ
ろうか。この点について全国保育士養成協議会の専門
委員会は平成25年度の課題研究報告書において「保
育現場から期待されていない養成校」の現実を浮き彫
りにした³⁾。

同報告書によると、卒業までに獲得することが期
待される内容は「社会的マナー」「仕事に取り組む姿
勢」「社会的態度」「思いやりや使命感をもって子ども
と接する」など、社会人としての最低限の態度に保育
の基礎的な知識が加わったものにすぎず、実習等を通
じて養成段階でも経験するはずの「仕事の遂行力」や
「日々の保育を実践するためのスキル」は勤務開始後
1,2年をかけて獲得するものと考えられているとの
ことであった。その背景として①実習期間や学びの内
容の不足、②養成校教員の現場理解、学生理解の不足
が挙げられ、現状の養成教育の不十分さを指摘する内
容となっている。養成校は余計なことをしないでほし

い。現場に入ってから鍛えるからという趣旨の発言は
折に触れて保育現場から聞くところであり、制度上免
許資格の付与を託されているからという以上の存在意
義を養成校は見いだせていないことを認めなければな
らないであろう。

養成校である本学科は3つの役割を担っている。青
年期教育・高等教育・職業専門教育の3つであるが、
それらに共通して求められているのは一にも二にも教
育の質向上である。「ここで学ばば、資格を取得でき
るだけでなく、就職でき、社会人としても通用でき
る」と思わせるだけの教育を、学生が自身の成長を実感
でき自信を持って社会に出ていけるような教育を展開
していかなければならない。

そのためにおさえるべきポイントは数多い。高大連
携(接続)に始まり入試、入学前教育、基礎学力の向上、
教養教育、実習を含む専門教育、卒後教育等、課題は
多岐にわたる。学生たちは高校卒業後すぐに入学する
者ばかりではない。近年では就労自立を目指して一定
数の社会人学生が入学してくる。同じ学年でも学生間
の学力や経験の個人差は大きく、一人ひとりが確かな
学習成果を得られる教育を実現するのは容易なこと
ではない。保育現場出身の教員であっても、90分×15
回の授業は現場経験に頼るだけでは成立せず、専門分
野に関する深い学識と授業方法のバリエーションに加
え、個々の学生に対する理解も求められる。

現場の保育は常に応用問題であるが、応用問題は基
礎基本がないとできない。限られた期間ゆえに、学生
に確かな道を歩ませたいと思うがあまり、教員はつい
手や口を出し過ぎるきらいがある。転ばぬようにレー
ルを敷いてしまうその姿勢が、逆に学生の自立する力
をそいでしまう面があることを見逃してはならない。

学生に必要な環境づくり、それは「自分がやるしか
ない」という環境、「生半可なことでは通用しない」
という環境、「でも、やればできる」という環境、「失
敗しても、やり直せる」という環境ではないかと考え
る。そうした環境づくりを、現在の保育の動向を見
えながら保育現場や卒業生たちと協働して行う。事
実上完成教育ではないのなら、保育現場との間に「育
てのりレー」が機能するようにしたい。

そうした教育の先に「自立した保育者」が育って
いくものとする。

引用文献

- 1) 関口はつ江：保育者の専門性と保育者養成（総説），保育学研究，39（1），9，2001.
- 2) 全国保育士養成協議会専門委員会：保育士養成資料集第44号 保育士養成システムのパラダイム転換ー新たな専門職像の視点からー，140，2006.
- 3) 全国保育士養成協議会専門委員会：平成25年度専門委員会課題研究報告書「保育者の専門性についての調査」ー養成課程から現場へとつながる保育者の専門性の育ちのプロセスと専門性向上のための取り組み（第2報），159-160，2014.